

【正論】伊勢志摩サミット 各国首脳は清けき神代の日本精神に触れよ

文芸批評家、都留文科大学教授・新保祐司

今年予定されていることの中で、精神的に恐らく最も深い意味を持っているものは、5月下旬に伊勢志摩で開催される主要国首脳会議（サミット）であろう。いうまでもなく、その地には伊勢神宮があるからである。

主要国の首脳が集まることにより、外国の人々の日本の文明に対する関心も深まるであろう。伊勢神宮は、日本の文明の基層にあるものの象徴だからである。

《危機の時代の伊勢志摩サミット》

かつて『日本美の再発見』で桂離宮を称賛したドイツの建築家、ブルーノ・タウトや『歴史の研究』で著名なイギリスの歴史家、アーノルド・J・トインビーなども伊勢神宮を訪れ、その日本的な美と精神性に心打たれた。外国の人々に、文化の商品化戦略につながっているクールジャパンとは一線を画した日本の文明の神髄を示すことが大切ではないか。

伊勢志摩を深く愛した昭和の俳人、山口誓子に「日本がここに集る初詣」という句があるが、確かにこの神聖なる空間には本来の日本が集まっているからである。

日本人にも自国の文明の核心にあるものを改めて認識する機会になるであろう。日本人自身が、戦後教育の下70年ほどたって、もはや自らの存在の根源をあまり知らなくなってしまったからである。いってみれば、日本人は、かなり日本人ではなくなったのである。

そういう日本の文明の危機の中で、日本人の中に、日本人としてのアイデンティティを回復したいという欲求を強く抱く人々が多くなってきているのではないか。ものを考えるに際しての軸がないことを痛切に感じているのである。日本人としてのアイデンティティの喪失の不安を抱える危機の時代に、伊勢志摩サミット開催は、それを超克するきっかけになるかもしれない。

私は伊勢神宮には何回も参拝しているが、伊雑宮にも行ったことがある。伊雑宮は「イゾウグウ」とも呼ばれ、内宮の別宮である。内宮から南に車で半時間ほど行ったところにあるが、ここまで来ると森厳の気が宿っている。崇高なるものが身に迫ってくるようであった。誓子に「葉月潮伊雑の宮をさしてゆく」の名句がある。

《日本文明の美質に心はせる》

伊勢神宮が象徴している日本文明の特徴は、清潔ということである。これは、伊勢神宮を訪れた人が皆、感じ取ることであろう。日本浪漫派の保田與重郎が、近世第一の歌

人と呼んだ伴林光平の漢詩の一節に「もと是れ神州清潔の民」というものがある。伴林光平は、幕末に勤王の志士として天誅組の挙兵に参加して『南山踏雲録』を書き残した人である。

日本人は、もともと清潔の民なのである。これは、物質的な意味だけではなく、精神の在り方についてもいえることである。伊勢神宮には、松坂も近い。松坂といえば、国学者、本居宣長である。宣長の有名な歌「敷島の大和心を人間はば朝日に匂ふ山桜花」にも、「大和心」は、「朝日に匂ふ山桜花」のような清潔な美しさとされている。これこそが、日本の文明の美質の最たるものであろう。

伊勢内宮の神職で、俳諧の祖といわれる荒木田守武に「元日や神代のことも思はるる」という句がある。伊勢神宮を訪ねると、その日本的な美というものに深い感銘を受けるばかりではなく、日本の歴史にもはるかに心をはせることになるであろう。「神代のことも」思うのである。

2012年の『古事記』編纂1300年を機に古代に対する関心が高まっているが、神武天皇の御東征を題材にした交声曲「海道東征」の大阪での公演が成功したのも、そのような時代思潮によるところがあるに違いない。伊勢志摩サミットが刺激となって伊勢神宮への関心がさらに高まり、神宮を訪れ「神代」に対する思いが深まっていくことが期待される。

《「劔刀いよよ研ぐべし」》

『古事記』をはじめ『日本書紀』や『万葉集』などの世界にもっと日本人は触れるべきであり、その親しみの中から、真の愛国心もおのずから生まれてくるはずである。こういう歴史的な素養の深みに根差していない愛国心は、日本のためにはならないであろう。

『万葉集』の精神を代表する歌人は、大伴家持である。「海行かば水漬く屍（かばね）山行かば草むす屍 大君の辺にこそ死なめ 顧みはせじ」とは、大伴氏言立である。その大伴家持が「族（やから）に喩（さと）す」として詠んだ歌「劔刀（つるぎたち）いよよ研ぐべし古（いにしへ）ゆ清（さや）けく負ひて来にしその名ぞ」は、今日では「族」に限定せずに、21世紀を生きる日本人に対して「喩」されるべきものであろう。ここにも、「清けく」が出てくる。清潔な精神のことである。

近来の混迷の進行がますます加速度を増している世界の中では、日本も「劔刀」を「いよよ研ぐ」べきであろう。しかし、その精神の在り方は「清けく」なければならない。そのようにして「古」代から続く日本という国家の「名」誉は、われわれ現在の日本人が、真の愛国心の中で「負」っていかなければならないのではないか。

（しんぼ ゆうじ）